

# 第7号 熊本市後藤是山記念館だより

## 淡 成 居

日本画家堅山南風と後藤是山とは生涯を通じ深く交流がつづきました。是山は明治19年生まれ、南風は明治20年生まれでちょうど同年代にもあたり、親しみやすかったのでしょう。

南風が大正2年、第7回文展に紅葉した櫺の情景を描いた「霜月頃」を出品し二等賞を受賞したときには、南風の帰郷の折、是山は画家の福嶋峰雲、古荘黙妍らと共に日本画家の山中神風の座敷で祝

### 久に寝る吾家の庭の蟬の声

ら歓迎を受けた南風でしたが、昭和34年の17年ぶりの帰郷の時には大変なことが起きました。この時の南風帰郷の目的は墓参と翌春の素描展のための阿蘇スケッチでした。熊本に着き4月20日、是山と共に生家にほど近い浄行寺の赤鳥居のある大神宮に参り、そのあと生家を訪ねました。家も間取りもそのまま、南風は感慨深げに是山に、「2階のこの間で絵を描いていると、また絵を描い

賀会をひらいています。このほかにも南風の帰郷の度に歓迎会が行われ、是山の旧居「淡成居」には、制作年ははっきりしませんが、江津湖で舟遊びを記念して制作された古扇面が残されています。南風が筍を描き、それを真ん中に、福嶋峰雲が青梅、山中神風が蛤、古荘黙妍が藻、山田隆憲が竹一枝、是山が俳句「杜若(かきつばた)江津湖の水をとり入れて」と揮毫しています。

このように帰郷の度には是山ら



〈南風との江津湖舟遊記念の扇面寄せ書き〉  
南風が描いた筍を中心に、福嶋峰雲が青梅、山中神風が蛤、古荘黙妍が藻、山田隆憲が竹一枝、是山が俳句を寄せ書きしている。

ているのだろうか、下の店からよくだらされたものですよ」と語ったと言います。

そして翌日の夕刻には帰郷の歓迎会が新町の料亭「おく村」で開催され、知事や市長をはじめ旧友からも出席し賑やかに行われました。南風も興に入り、上手な歌も披露したそうです。ところが宿に帰りしばらくすると突然、気管支肺炎を発病し、その宿で絶対安静の療養を強いられ、5月1日からは

### 南風

熊大病院で療養することとなりました。その後幸いに容体は少しずつ回復し、画家仲間から、「俳句でも考えて病苦をわすれろ」と言われるほどになりました。そこで南風は俳句を詠むようになります。その時詠んだ句をいくつか紹介しますと、

「そこはかの庭の若葉に慰みぬ」  
「熱下る朝爽やかに若葉風」  
「病院の廊人繁く梅雨しとど」  
などです。そして7月20日退院し、熊本駅から東京の自宅へ帰ります。そして自宅で詠んだ一句が、「久に寝る吾家の庭の蟬の声」です。わが家が一番という句です。

〈参考〉  
東火第356号(昭和34年5月1日発行)  
東火第361号(昭和34年10月1日発行)

# 俳誌『かはがらし』と『東火』で辿る

## 後藤是山の半生(その1) 『かはがらし』創刊時のエピソードなど

後藤是山の活動の大きな柱の一つは俳人としての活動です。

もともと是山は短歌から始まり、大正10年(1921年)には与謝野寛、晶子の『明星』の同人となるなど短歌の活動は活発でした。

それと並行し俳句も盛んに行い、昭和2年(1927年)、是山が41歳の時、俳人末次青雉(すえつぐせいち)らと共に俳誌『かはがらし』を創刊します。そして昭和19年に『東火』と改称し、昭和56年(1981年)1月まで、是山が94歳になるまで533号を55年間にわたって発行しました。令和8年(2026年)は是山の生誕140年、没後40年です。そこで俳誌『かはがらし』と『東火』では是山の半生をたどってみたいと思います。今回は『かはがらし』の創刊当時をたどります。

### ◆俳句誌『かはがらし』創刊までの是山

俳誌『かはがらし』誕生までには、若き是山として苦勞もありました。是山は九州日日新聞社入社後から短歌雑誌、文芸雑誌の創刊にも参加していました。

是山にとって初めての雑誌創刊は、九州日日新聞社で同僚だった森園天涙(もりぞのてんるい)と大正4年(是山29歳の時)に創刊した短歌雑誌『山上の火』でした。そして大正6年頃、是山は竹田双松らと俳誌『銀杏』を発行します。竹田双松とは夏目漱石の在熊時に五高生らが創設した「紫溟吟社」にも参加した人です。さらに大正7年には文芸誌『燄(ほのお)』の創刊に参加します。この時、後に『かはがらし』を一緒に創刊することとなる末次青雉

もいました。

### ◆昭和2年『かはがらし』創刊

俳誌『かはがらし』創刊の背景については、同人の佐分利自閑が昭和9年4月号の『かはがらし』で掲載された『かはがらし』の生まれるまで』に詳しく述べられています。

それによると母体は熊本電気株式会社(後の九州電力)社員によって作られた「熊電俳句会」で、是山は客賓となり宗匠を務め、会の取りまとめ役は熊電社員であった末次青雉が務めていました。

その頃吟行や俳句大会が行われると、その時の句は是山を通して九州日日新聞にも発表され、徐々に「熊電俳句会」の名も知られてくるようになってきました。そうになると当然、皆の気持ちは高揚し、自分たち自身の俳句雑誌を発行したいという思いが募ってきます。



南画家小室翠雲の『たんぽぽ』が表紙となった『かはがらし』創刊号。(昭和2年4月1日発行)

問題は発行費用。そこで「熊電俳句会」の人たちを中心に20数名が一口10円を出資することにします。当時の米価が10キロ当たり2円80銭ほどでしたので、この10円は現在の金額に換算すると3〜4万円でしょう。

俳誌名は是山によって『かはがらし』と命名され、第1号の記念すべき表紙は日本画家の小室翠雲(こむろすいうん)が描いた『たんぽぽ』になりました。小室翠雲のような大家に表紙絵を依頼できたのも是山によるものでした。

### ◆俳誌名の『かはがらし』とは

「かはがらし」とは、和名でオランダカラシ、英名でウォータクレス、仏名でクレッソンのことです。是山は創刊号で「かはがらし」のことに触れ、「水前寺の池尻から江津湖の湖口に懸けて最も多い植物で(中略)湿草類の『葶塵(ていれき)』のことで、水前寺の清浅の水に生じて、3、4月頃、雪白の小さい十字花をつける」と説明しています。

昭和4年7月号の『かはがらし』には、是山が徳富蘇峰を案内し雲仙岳へ登山した時、蘇峰もウォー

タークレスを知っていて、富士の湖水などにもあり、食べると一寸びりっとして茎もうまいと話しています。

『かはがらし』はこの号から蘇峰が揮毫した「葶塵」が使われ、昭和13年まで続きました。



蘇峰が揮毫した「葶塵」が『かはがらし』の表紙となった昭和4年7月号。

#### ◆『かはがらし』のめざした精神

俳誌『かはがらし』には並々ならぬ精神がありました。是山はその時の決意を昭和7年7月号の『かはがらし』に「一百号に題す」として書き残しています。

その精神とは、「第一期の『銀杏』以来の精神を継承し、あくまで郷土雑誌としての歩みを続け、如何に未熟であっても雑詠選者も課題選者も、我等の一団のみを以てし、世上の流行流派の外に超然として、独自一己の境地を開拓せんとするものであった」と述べ強い決意を示しています。

ここでいう「第一期の『銀杏』とは、俳人・廣瀬楚雨（ひろせそう）、末次青雉らが明治42年に創設した「銀杏会」が発行した機関紙『銀杏』を指しており、この機関紙は中央俳壇の趨勢におもねず、新傾向に雷同することを厳しく批判したものでした。

是山はこの精神により『かはがらし』の編集は「中央の大家先生を迎へることを敢えてせず（中略）雑詠及び文章の選は予みづから当たり、課題選は九州内における先輩友人に依頼することにして今日に及んだ」と述べています。この編集方針は、そのまま『東火』にも継承され、昭和56年の最終号まで貫かれました。

このことが『かはがらし』から『東火』へと同人500人を有するまでに広がり、中央におもねない地方俳誌として高く評価され、また長きにわたり発行が続けられた原動力ともなりました。



『東火』第533号(昭和56年2月31日発行)。この号が最終号となった。是山、94歳の時である。

#### 『かはがらし』を築いた人々

同人・佐分利自閑氏が『かはがらし』第1号から通算251号となる昭和25年6月号の『東火』に「創刊当時のかはがらし同人の片影」を寄せています。その中から、『かはがらし』の創刊に携わった人々を紹介します

**後藤是山** 「先生は生みの親であり、名づけの親であり、大恩ある育成の親である」と述べています。そして是山の指導を受けなかったら「創刊を見たとしても、3号雑誌に終わったことは断言をばからない」とまで言っています。是山は、九州日日新聞社の時代は社説も書き、『かはがらし』では雑詠選や随筆『葶塵雑俎』などの連載を行い、句会や吟行にも欠かさず参加し、時には酒席にも出席し悠々としていたと言います。自閑は是山のことを『多忙な呑気屋』と評しています。

**末次青雉** 是山が『かはがらし』の権威であり主幹であったとするのと、「青雉は『かはがらし』同人を引っ張っていく原動力だった」と

述べています。青雉は熊本電気株式会社技師で、水力発電所建設に従事していましたが、寝食も忘れて発刊句稿の整理に当たっていたそうです。「是山のいるところ青雉あり、青雉のいるところ有侍(後述)あり」と言われ、この3者によって『かはがらし』創刊を見たと言っても過言ではないと述べています。

**中村有侍** 『かはがらし』創刊の大功労者で「是山、青雉をたすけて、創刊後の経営については、有侍の力に俟(ま)つものが多い」と評価しています。有侍は吟行の企画も得意で、昭和2年4月号の川尻の鯉漁などの豪華吟行は、この人が企画していたようです。

**福原香苗** 創刊当時から少し遅れて同人になった人で、有侍の後を引継ぎ、事務処理も一手に引き受け是山を助けました。熊本電気株式会社技師として入社しましたが、温良な人柄で営業部門の第一線でも活躍しました。自閑は香苗の俳句を「彼れが玉の如き美質をそのまま遺憾なく發揮していた」と高く評価しています。

## 記念館 ニュース

〔特別企画〕平成28年熊本地震から10年  
熊本明治震災日記奇談語り  
〜地震のあつと傘屋んもうかる!?〜  
を開催しました。



寿咲さんと藤川さんの公演に熱心に聞き入る参加者  
(熊本洋学校教師ジェーンズ邸にて)

平成28年熊本地震で倒壊し、その後現在地に移築復元された復興のシンボルとも言うべき熊本洋学校教師ジェーンズ邸を会場に、令和8年(2026年)4月19日(日)、『熊本明治震災日記奇談語り〜地震のあつと傘屋んもうかる!?〜』を開催しました。これは平成28年熊本地震から10年とな

る特別企画として開催したものです。当日は40人を超える入場者が詰めかけ会場はいっぱいになりました。

まず第一部で文化財課松永直輝文化財保護参事より、ジェーンズ邸の被害の状況や復元工事の様子、技術的手法など、また、当初は現在の第一高校内にあったジェーンズ邸がどんな変遷を経て現在地に至ったかなどについても説明がありました。

そして第二部で語り師・寿咲亜似(すきあい)さんによる「熊本明治震災日記奇談語り」が、箏演奏家・藤川いずみさんの音楽とともに始まりました。

明治熊本地震は明治22年7月28日、午後11時40分ごろ、金峰山の南東部を震源として発生した大地震です。被害は大きく、余震の恐怖もあって、様々な流言飛語が飛び交い、今では信じがたい奇談が起りました。

この日の「奇談語り」は寿咲さんの熱のこもった語りと臨場感あふれる藤川さんの箏の演奏で、すばらしい公演となりました。

皆さんは二人に引き込まれ熱心に聞き入っていらっしやいました。

## 後藤是山記念館へ行こう！

### 「うつりゆく時代の中で 淡成居100年」展を開催中

是山が水前寺に「淡成居」を建て移り住んだのは、昭和2年、今からちょうど100年前になります。

「淡成居」とは「君子の交わりは淡きこと水のごとし」という故事から徳富蘇峰が命名したものです。

また「淡成居」は、是山が水前寺に住む前に住んでいた北千反畑の家が時習館2代教授・蘇孤山の旧居であったことから、その旧居の解体に合わせ、その一部を移築したものとも言われています。

そこで本展では「淡成居」の概要や変遷をたどるとともに、庭園に残る蘇峰の「公孫樹詩碑」建立のきっかけとなった資料や是山が残した写真、交流のあった画家・近藤浩一路や山田隆憲、俳人の上村占魚などの作品や書簡などを紹介し、「淡成居」が刻んできた100年の歴史を伝えます。



### 第7号

熊本市後藤是山記念館だより  
『淡成居』

#### 発行日

令和8年(2026年)4月●日

#### 編集・発行・文責

熊本市後藤是山記念館長 植木英貴  
(熊本市文化財課所管)

〒862-0950

熊本市中央区水前寺2丁目6-10

電話・ファックス

096-382-4061

#### 開館時間

午前9時30分〜午後4時30分

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)

年末年始(12/29~1/3)

入館料 大人 200円

小人 100円

